



北東北地域で周年親子放牧を実践している農家における子牛の発育成績と親牛の繁殖成績

研究推進部
東山 由美 (ひがしやま ゆみ)

周年親子放牧とは

これまでの肉用牛の放牧は、妊娠が確定してから分娩前までの雌牛だけを春から秋の期間だけ放牧する、という限定的なものでした。舎飼いに比べ飼料費や労働費を削減できる放牧の利点をもっと活用するため、周年親子放牧という技術が提唱されています。

周年親子放牧では、従来の限定的な放牧とは異なり、基本的に分娩は放牧地で行い、生まれた子牛は親牛と一緒に放牧し、草がない冬季も屋外で飼うという、文字通り周年で親子で放牧するスタイルで飼養します。大きな施設が不要で大幅に省力化できるため収益性は高く、低迷するわが国の肉用牛生産基盤を強化する一つの方策として注目されています。

しかし現時点において、周年親子放牧はほとんど普及していません。親子が一緒にいることで離乳が遅れ、子牛のエサの食い込みが悪く発育が劣る、親牛の繁殖機能の回復が遅れる、とされているためです。特に寒冷地域では、冬季に子牛を屋外で飼養することに強い抵抗感があります。

そのような中、北東北地域で長年にわたり周年親子放牧を実践している農家を2年間にわたり調査する機会に恵まれたので調査結果をご紹介します。

子牛の発育性

調査地は12月から2月にかけて日平均気温が氷点下になる岩手県北部にあります(写真1、2)。飼養頭数は繁殖雌牛が20頭前後、子牛は10頭前後で、約3.6haの放牧地に一群で定置放牧され、放牧頭数に対して放牧地が狭いため補助飼料も給与されています。5頭程度飼養できる牛舎が放牧地内にありますが、分娩前後と子牛の出荷前に利用する程度で、子牛は生後約20日で冬季でも屋外

で飼養されます。9ヵ月齢までの子牛を対象に、冬(12~2月)生まれと、冬以外の生まれの子牛に分け、日増体量を比較しました(図)。平均日増体量は、冬生まれの雄子牛で1.13kg/日、雌子牛で0.93kg/日で、冬以外の生まれの雄子牛で1.03kg/日、雌子牛で0.96kg/日でした。冬生まれの子牛を生後早い時期から屋外で飼養しても、冬以外の生まれの子牛と差はなく、いずれも日増体量は1kg/日前後で発育は良好であることがわかりました。



▲写真1 / 調査地(秋)



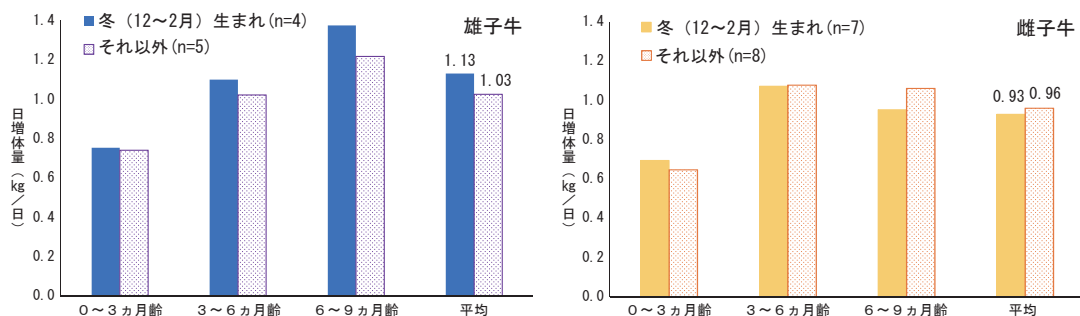
▲写真2 / 調査地(冬)

親牛の繁殖性

親牛の繁殖成績について、2015年以降のデータによる分娩間隔の平均値は410日、初産月齢の平均値は25.3ヵ月齢で、2019年度の全国平均値(分娩間隔:407.8日、初産月齢:25.3ヵ月齢)とほぼ同じでした。ここでは、6~7ヵ月齢頃まで子牛の離乳は行っていませんが、親牛の繁殖成績は特段低下しない、ということがわかりました。

おわりに

以上のことから子牛の発育は良好で、親牛の繁殖性も平均と同等であることがわかりました。このようなデータを蓄積し、周年親子放牧の普及を図っていきたいと考えています。



▲図 / 子牛の日増体量